

第一回

知を共有する楽しみ—学校と博物館の連携・協働による科学教育の振興

国立科学博物館 小川 義和

(高三〇回)



はじめに

「知識は感動からはじまる」

これは米国の博物館に掲げられていた言葉です。博物館は学びの場ですが、決して強制力はありません。博物館が有するとても大きく大きいもの、美しいもの、膨大な数の資料などに人々は圧倒されます。そこでは人々が本来持っている知的好奇心が刺激され、想像力と感性が磨かれことでしょう。

本来、博物館は歴史、美術、自然などに関する資料を収集し、保管し、関連する調査研究を行い、それらを展示・公開し、一般人々の学習活動を支援しています。このような基本的な機能に加え、科学技術の発達、自然環境の激変、行財政改革の進展など、博物館を取り巻く環境が大きく変化する中で、博物館には新たな役割、機能が求められています。

平成十八年度の「くすのき講座」では、学校と科学系の博物館の連携の観点から変革しつつある博物

館の役割を考えてみました。少々堅苦しくなりますが、以下に紹介します。

博物館を取り巻く環境の変化

二十世紀の終わり頃から、欧米の博物館においては、社会における博物館の役割を見直そうとする議論が盛んになってきました。その成果は各国のレポートとしてまとまっています。例えば一九九一年の米国の博物館協会の報告では、博物館は「公共サービスと教育のための施設」として、博物館における教育の重要性を指摘しています。また一九九七年の英国の博物館を所管していた文化遺産省の報告は、博物館を市民の共有すべき財産と位置付け、それを活用するための教育が重要であるとしています。このような議論は、わが国でも検討されました。二〇〇〇年の日本博物館協会の報告書では、「対話と連携」をキーワードに、開かれた博物館活動のために、博物館が学校をはじめ他の教育機関との連携を深め、より教育力、博物館力のある生

涯学習機関としての役割を強調しています。

このように現代の博物館は、社会の様々な機関と連携・協働し、人々からの多様な学習要請にこたえる学習資源として位置付けることができます。

学校と博物館との

連携の現状と課題

さて博物館の学習資源としての役割の重要性は指摘されてはいるものの、博物館には学校のような統一的な教育課程は存在しません。したがって何らかの枠組みで博物館の学習活動を捉え直さないと、

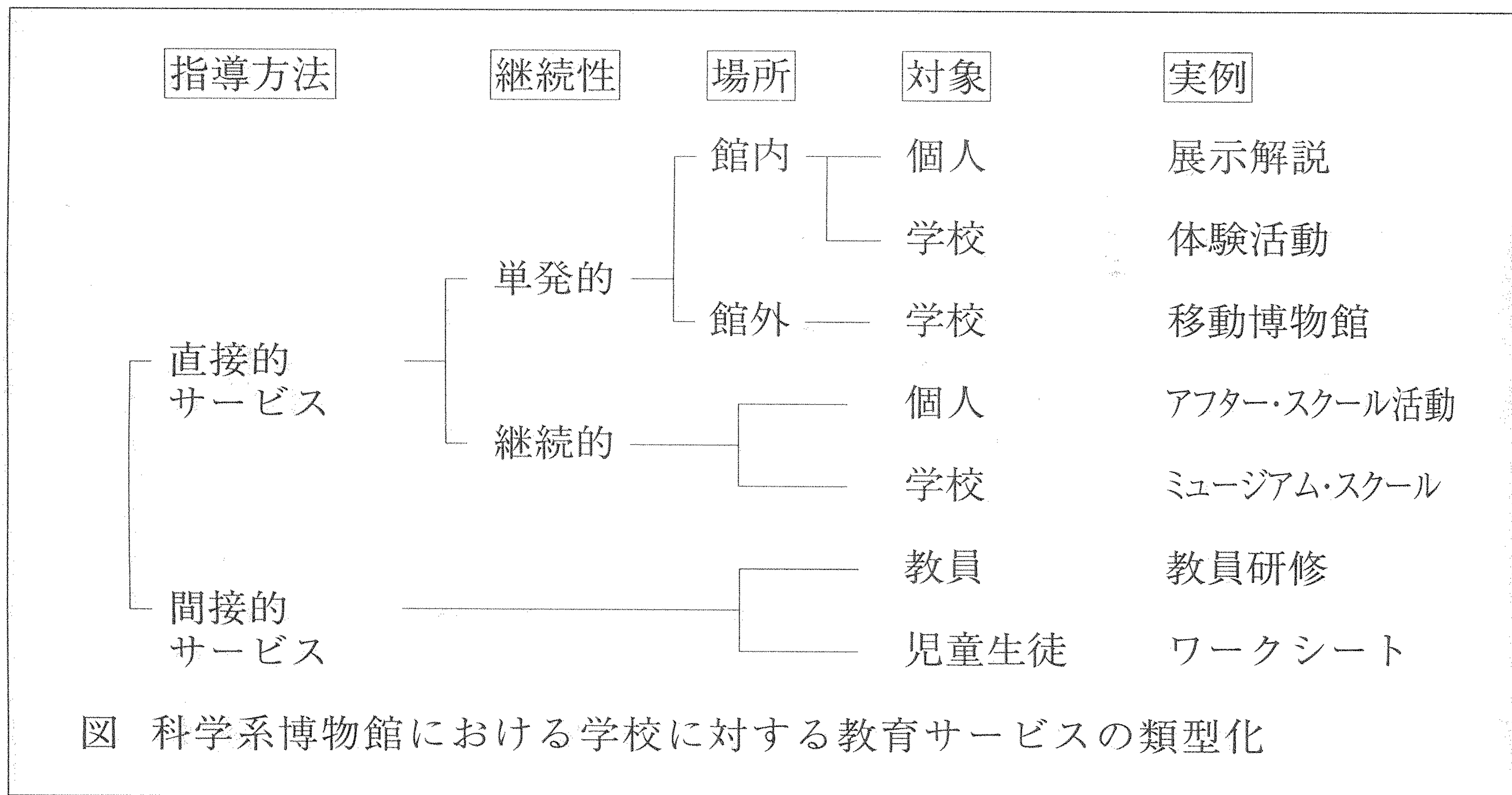


図 科学系博物館における学校に対する教育サービスの類型化